月刊
えくてびあん
立川と語ろう　立川に生きよう
5
<EKUTEBIAN VOL.16 MAY 1998 EKUTEBIAN>
まいあーと■ステンドグラス「瞬間」by 田尻洋子

たちかわの石仏たち④

弁天池跡の『三つの神仏』

古い時代の根川、その水源の一つだったと言われてきた通称弁天池は、別の名を「滝つぼ」と呼ばれ、親しまれてきました。かつて、立川礫層から湧き出す水は、滝のように音をたてて池にそそぎ、枯れることを知りませんでした。昔から周辺農家の用心水として手厚く守られていたのと同時に、池の端には「弁財天」「不動尊」「庚申さま」が祀られ、江戸時代から続いた民間信仰の「聖域」でもありました。周辺にはカヤ、ツゲ、ヤブツバキなどの古木が茂り、盛夏には涼を求める人々の憩いの場所でした。

昭和四十二年、富士見高架橋の建設のため、池は埋められてしまいました。現在は少しばかりの湧水のある池、弁財天の祠と石仏は中の島に移され、昔の面影はなくなってしまいました。

立川民俗の会　鈴木　功さん・談

●所在地：富士見町４丁目（富士見高架橋下）
●建立：不動明王（左・大正５年再建）
弁財天（中央・大正２年再建）
庚申塔（右・享保10年）

写真協力／中日新聞

公開競技である『ショートトラックレース』には、三澤さんはじめスレッジホッケーの選手たちがエントリー。会場を湧かした。

えくてびあんレポート

僕はここにいる。

“氷上の格闘技” 全日本チームのゼッケン「1」は立川人

3月、日本中を湧かせた長野冬季パラリンピックに立川からひとりの青年が出場していた。
三澤英司さん（上砂町）、25歳。種目はアイススレッジホッケー。
ひとつのパックをめぐって激突につぐ激突。
体力の消耗は激しくケガとも隣り合わせの危険な競技だが、右足を失い、
一旦は後ろ向きになりかけた三澤さんにとって突破口”となったかけがえのないスポーツだ。
激突の度に氷上に飛び散る汗は、そのまま三澤さんの声を代弁する。僕はここにいる！

“スレッジ” と呼ばれるそりを駆り、パックを敵ゴールに叩き込む。まさに格闘技の迫力だ。

「失くしたもの」は大きい。でも「得たもの」はもっと大きい

三澤英司さん

長野冬季パラリンピック
アイススレッジホッケー日本代表

希望や可能性に見切りをつけ、それを何かのせいにしてやりすごしてしまう人間の、いかに多いことか。

三澤英司さん（上砂町3丁目）は高校3年の時、重い病を患い、右足切断の憂き目を見た。不慮の事態に、十代の少年が将来を悲観してしまったとしても、不思議はない。しかし、三澤さんはそれを受け入れた。人生を「肯定」する道を選んだ。三澤さんは、スポーツという"突破口"を発見したのだ。

長野での三澤さんたちの活躍は、突破口を得た人たちの喜びである。そしてこの"突破口を得る"という一点においては、障害を持つ、持たないという「区別」など、どこかにすっとんでしまう。そう、パラリンピックから聞こえてきたのは、大いなる「人間讃歌」だったのだ。

立井　僕は今回「アイススレッジホッケー」という競技を初めて知ったんです。スポーツとしてはまだ新しいものなんですか。

三澤　発祥地のノルウェーでは、もう三十年以上の歴史があるようですね。でも日本に紹介されたのは三年ぐらい前なんです。

立井　それじゃ日本では、三澤さんたちが「最初の」競技者ということになるわけですね。参加国は何ヶ国だったんですか。

三澤　七ヶ国です。戦績は一勝二敗一分け、五位に終りました。

立井　でも今回のパラリンピックで知名度も上がったことでしょうし、これからがまた楽しみですね。

三澤　ええ、今回が出発点という感じですね。

立井　今度の大会は、見ていて今までとは違った印象を受けたんです。というのも、これまでは「パラリンピック」と聞くと、どうしても「障害を持つ人の」という空気が前面に出ていた。オリンピックに比べて入ってくる情報も少なかったですしね。それが今回は純粋にスポーツとして、ゲームとしての熱度が感じられてとても面白かった。

三澤　今度の大会は、マスコミの扱いも全然違ってましたね。夜のニュース番組でも、これまではトピックス的にチラッと触れるぐらいだったでしょう。『ニュース・ステーション』などは競技の結果をスポーツコーナーのメインで放送してて、パラリンピックの話題が終ったら「続いて、その他のスポーツです」って（笑）。

立井　やはり現場の雰囲気も違いましたか。

三澤　競技を見ていた人によく言われたのは「こんな面白いスポーツがあるのか」といった感想なんです。アイススレッジホッケーという競技を一つのスポーツとして、ゲーム自体を楽しんでくれた人がとても多かったですね。

立井　スポーツとして面白ければ、やる方も見てる方も、もう障害の有無など関係ないですものね。

三澤　ええ。試合が終わってから「スレッジ（そり）はどこで買えるのか」とか「どこへ行けば習えるのか」とかの質問をたくさん受けました。その多くは健常者の人からの質問だったんですよ。

立井　ほう、健常者からですか。するとパラリンピックから生まれたスポーツが、健常者に広がっていくことも考えられる。

三澤　すでに海外では盛んなようです。障害の有る無しに関係なく参加できる車イスを使ったバスケット大会ですとか。

立井　そう考えると近い将来、「オリンピック」と「パラリンピック」という区別も無くなっていくんじゃないでしょうか。

三澤　充分考えられますよね。入場行進をいっしょに行うとか、オリンピックの競技の合間にパラリンピックの試合を行うとか、そんな具体的な声もあがっているようですし。会場が同じ場所ですから、出来ないことはないでしょう。

立井　そういえば先日のセンバツ高校野球で、開会式の選手宣誓に「手話」を取り入れてたでしょう。

三澤　ええ、そうでしたね。

立井　あの時、球場全体がドッとどよめいて、直後にとても温かい空気が球場を覆った。ことスポーツの世界では、どんどん「垣根」がなくなってきている感じがしますね。

三澤　僕は右足が無いんですが、道具を使えばできるスポーツがたくさんある。もともと道具を必要とするスポーツはたくさんあるわけですからね。そういう意味でも、スポーツの世界は垣根を越えやすいんじゃないでしょうか。

立井　今、右足のお話が出ましたけれど、失礼ですが、事故で失くされたんですか。

三澤　いえ、病気です。小さい時から時折右足が痛むことがあったんですが、医者に行っても「成長期によくあること」って言われて、ロクな検査もしないままに放っといたんです。それが高校三年の時、もう立てないぐらいの激痛に襲われて、もうその時点で医者に行っても手遅れ。悪性の腫瘍ができてたんですね。根元から切断です。

立井　それはちょっとねえ…。納得がいかなかったでしょう。

三澤　しょうがないというか、やっぱり二、三年は塞いでいましたよね。丁度、受験も控えてた頃で、ああ自分は遅れてしまった、みんなと違う世界に来てしまった。友達もいなくなってしまうんじゃないかって、そんなことばかり考えていました。

立井　自分ごとなんですが、実は僕の息子も手に障害を持っているんですね。

三澤　あ、そうなんですか。

立井　息子の場合は生まれつきなんです。生まれたばかりの赤ちゃんは顔を引っ掻いたりするといけないんで、みんな白い手袋をはめさせられるでしょう。それを見て「ああ、この子はずっとこの手袋をはめたままだろうなあ」と思ったんです。

三澤　ええ、ええ。

立井　ところが、その後すぐに医者に呼ばれて、そこでその先生が「なるべく早い時期に手袋をはずすように」と言うんです。親に「隠そう」という気持ちがあると、それが子供に移る。親が大らかにしていなければいけないんだと教えられてね。あの先生の言葉がなかったら、今でも手袋をはめさせていたかも知れません。

三澤　僕の場合もまさにそうでした。自分が平気でも親の方で心配したり、人目を気にしたりとかで、ずいぶんケンカをしました（笑）。

立井　ああ、やっぱりそうだったんですか。

三澤　たとえば、近所にちょっと買物に行くだけでも「義足を着けていけ」と言われて。義足って身体に着けるのに時間がかかるんですよ。今も会社にいる時だけで、普段ははずしているんです。その方が身体もラクなんです。でも親にしてみれば、せめて義足を着けて、他の人と変らない姿で表に出て欲しい。その気持ちはわかるんですが、僕のような人間がどんどん表にでなければ、何も変わらないと思うんですね。最近は随分大らかになってくれています。長野にも応援に来てくれて。

立井　三澤さんがそういう積極的な考えを持てたのは、やはりスポーツがきっかけだったんですか。

三澤　ええ、以前からいろいろやっていたものですから、自分も道具を使えば何とかできるんじゃないかと。やってみたらテニスもスキーも、自転車やバイクにも乗れるんですよね。

立井　前々から思ってるんですが、実は世の中には「健常者」というのはいないんじゃないでしょうか。

三澤　目が悪い人がメガネをかけるというのも、道具に頼るという意味では一緒ですからね。

立井　程度の差はあるとしても、心理的なものや精神的なものを含めると、今の時代、人間はどこかしら病んでいる。実は健常者と呼ばれている人ほど、三澤さんにとってのスポーツのような、今の環境から一歩踏み出す「突破口」のようなものを欲してるんじゃないかと思うんです。

三澤　僕の場合、足を切るのがもう少し遅かったら命が危なかったんです。だから僕がスポーツをやるのも「今ここにいるんだ」という喜びを、自分で確認しているのかも知れません。そう考えると足がないということは、僕の幸せの「尺度」にはならないんです。確かに足を失ったことは大きいけれど、それ以上に得たものの方が大きいんですね。パラリンピック出場はもちろんのこと、多くの仲間にも出会えましたし。

立井　そう言えるようになるまでには並大抵じゃなかったでしょう。

三澤　国立に障害者のスポーツ施設があるものですから、僕は立川にいるということで恵まれていたんだと思います。地方だと中々ないですから。

立井　将来はやはり「コーチ」とか「監督」といった指導される道をお考えですか。今度は三澤さんが「突破口」を与える立場で。

三澤　そうですね。カッコつけて言っちゃえば、使命感みたいなものがあります。

立井　日本代表なんだから、それを大きく持ってもらわないと（笑）。どうぞ、がんばってください。

富士見町		
ダイクマ 立川店	富士見町1-24-9	526-1161
リーセントパークホテル	富士見町2-1-8	526-3111

羽衣町		
洋菓子サロン ケーキスタジオ35	羽衣町2-6-1	527-6808
林歯科	羽衣町2-7-10	522-5657
中島豆腐店	羽衣町2-12-34	522-5732
珈琲屋 らうむ	羽衣町2-27-9	526-3643
和風レストラン 蔦屋	羽衣町2-27-14	526-3698
立川商店	羽衣町2-30	522-3565
泰明堂	羽衣町2-31-1	522-3353
おそのい時計店	羽衣町2-32-2	522-5211
文具の ないとう	羽衣町2-33-1	522-3677
赤松タバコ店	羽衣町2-42	524-7852

曙町		
ルミネ立川店 2F受付	曙町2-1-1	527-1411(代)
オリオン書房 ルミネ立川店	曙町2-1-1-7F	527-2311
印徳 ルミネ立川店7F	曙町2-1-1-7F	527-1260
ビューティータナカ ルミネ立川駅ビル店	曙町2-1-1-9F	527-6917
東京赤十字血液センター 立川出張所	曙町2-1-1-9F	527-1140
朝日カルチャーセンター立川	曙町2-1-1-9F	527-6511
日の出屋 本店	曙町2-2-18	522-3308
オリオン書房 第一デパート店	曙町2-2-25	523-3311
オルゴール・雑貨 グーシーハウス	曙町2-3-7	525-2588
第一勧業銀行 立川支店	曙町2-4-5	522-5151
富士銀行 立川支店	曙町2-4-6	524-3121
二木のパン	曙町2-6-4	522-2278
さくら銀行 立川支店	曙町2-6-11	522-2151
サヴィニ	曙町2-7-10	525-1662
多摩中央ミサワホーム	曙町2-8-29	527-3388
三上鰹節店	曙町2-8-30	522-3259

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は富士見町・羽衣町・曙町(A)・高松町・栄町のお店です。

曙町		
パティスリー バーゼル	曙町2-11-11	523-3746
cafe バーゼル	曙町2-11-11-2F	523-3746
立川リージェントホテル	曙町2-11-7	522-1133
フロム中武 1F受付	曙町2-11-2	524-7111(代)
ホワイトハウス フロム中武	曙町2-11-2-4F	525-8558
ばさーじゅ フロム中武	曙町2-11-2-4F	522-1941
るもん	曙町2-12-13	527-3022
ケンタッキーフライドチキン 立川支店	曙町2-12-16	528-2636
住友銀行 立川支店	曙町2-13-1	522-6171
東京三菱銀行 立川支店	曙町2-13-3	524-4121
立川郵便局（本庁舎）	曙町2-14-36	524-6114(代)
喫茶アバン	曙町2-17-15	527-4479
トボス 立川店	曙町2-18-18	525-0331
エミリーフローゲ 立川高島屋店	曙町2-39-3-3F	526-9788

高松町		
多摩画材（景品交換所）	高松町2-1-25	522-6031
丸助青果店	高松町2-4-18	522-3542
スーパー やなぎや	高松町2-5-17	522-4322
肉の専門店 伊勢屋	高松町2-6-20	524-2734
洋菓子 マリアン	高松町2-10-22	524-3912
横町屋	高松町2-11-23	522-2609
山梨中央銀行 立川支店	高松町2-16-13	526-1571
フレンド書房	高松町3-18-2	527-1555
TIP-TOP Cafe-Restaurant	高松町3-27-27	525-2030

栄町		
メンズカット ヤザワ	栄町2-59-8	536-8738
多摩中央信用金庫 栄町支店	栄町2-59-8	536-9711
手打ちそば 信更	栄町5-12-1	537-0991
相模屋酒店	栄町5-61-8	536-2476
森田接骨院	栄町6-6-25	535-6240

真味百撰⑭　しゃぶしゃぶ・鍋料理 しゃぶ・りん

錦町2-1-33 三紀ビル3F／527-2228
PM 5：30～AM 1：00／不定休（※5月は5、6、7日が休）

洗練されたアトモスフィアの中で味わう、しゃぶしゃぶ料理。
「倫（りん）」の志が生きる"知る人ぞ知る"店

『しゃぶ・りん』の"りん"は「倫」。人のふみ行うべき道の意。人の間のすじ道、転じて、仲間という意味も持つ。「お客様と真っ直ぐに向かい合っていきたいという気持ちを込めて付けました」と語るのは、ご主人の田中義昭さん。

田中さんの出身は大阪。実家が割烹料理店だったため、料理の道に進んだのは全く自然なことだったという。板前である父君のもとで修業後に上京。さらに都内で腕を磨き、3年前、ここ錦町に自身の店を持つに至った。

高級感と居心地の良さが絶妙にマッチした店内。気軽に楽しめるテーブル席、宴会などにはお座敷、とあらゆるニーズに応えてくれるが、常連になるとカウンター席に座る客が少なくない。料理もさる事ながら、田中さんとの"会話"を楽しむためである。「コミュニケーションから総てが始まると思います」と語る田中さん。その言葉には、倫の字に込めた「志」、そしてカウンター越しに小さな輪を積み上げ、3年目にして多くのファンを培った「自信」にあふれている。

予算に応じて¥2,800からのコースが用意されているが、人気は松坂牛の「蘭」コース（¥6,800）。ちょっと贅沢をしたい時は、メインに松坂牛の特選サーロインを盛り込んだ「倫」コース（¥9,000）がお薦め。

東風

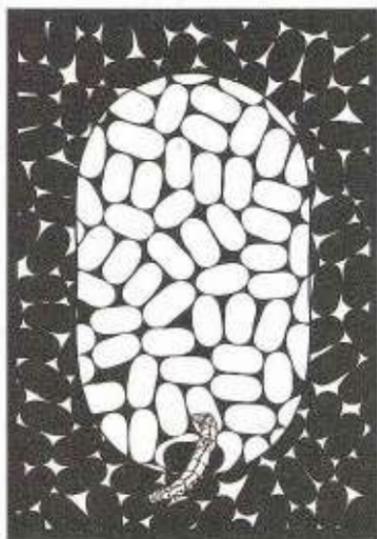
日本人が歌を詠むのに雲・月・花の三つの素材があれば充分といった詩人がいた。極論かも知れないが、遠からずであろう。花といえば無論、桜である。その花の時節も過ぎてしまった◆今年、新聞や雑誌、TVでよく紹介されていた桜の名所に昭和記念公園がある。いよいよ「全国区」にのしあがったのであろうか。「地方区」に甘んじるかも知れないが、根川緑道や諏訪の森公園の桜も見落とせない。嗚呼、立川に春が来たという実感はこちらの方にあるのじゃないだろうか◆今年、西洋人ばかりで花見をしている光景に出会った。ちょっと奇妙であった。と云うのも、本格的すぎるのである。日本の庶民は筵を見つけるのが大儀なので水色のビニールシートを代用しているが、西洋人のそれはホンモノの筵で、あまつさえ酒に燗をつけるのに、どこかの古道具屋で見つけてきたのであろう、炭をおこしてする本格的な燗付け器を用いている。あまりに伝統にのっとったやり方だと、却って芝居がかって見えるから不思議である◆ところで、花に「酔う」ということがある。酔ってなお歩くから疲れるのだ。歳時記に「花疲れ」の一項がある。江戸の後期から使われはじめた言葉で、花衣を着た女性が家に帰り着いて帯もとかずにいる風情などがそれであろう。その「花」も散って今は葉桜の季節。それもまた佳し、美しい季節を迎えた◆葉桜を　きれいと思う　えくてびあん

（表紙）ステンドグラス「瞬間」　田尻洋子
（編集）池田論男　小林辰史　隅川　理　名尾康真
　　　　山田恵子
（写真）中村　伸　五来孝平

月刊えくてびあん　第166号
平成十年五月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2－17－5
杉田ビル6F　〒190-0012
電　話　〇四二(528)〇〇八二
FAX　〇四二(528)〇〇六五
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

◆ 蚕 ◆

私の立川原風景 第十回

田中 清（上砂町）

砂川（アメリカ村）にアトリエをかまえてまもなく、胆のう摘出の手術をした。療養中、子どもを保育園へ送りにいった時、そこで育てているカイコが桑の葉を食べているのを見て、自分の体に感動が走るのを覚えた。

カイコの体内を、食べた桑の葉が脈打ちながら動いていくのが透けて見えた。自分の体が弱っていたためでもあったのであろう。黙々と食べているカイコに、強い生命力を感じた。

郷里の但馬（兵庫県北部）は養蚕が盛んだった。カイコは、いつも頭の中に素材としてあったが、これを機に養糸試験場よりカイコを分けてもらい、スケッチが始まった。

蚕は私の原風景であり、但馬・多摩・立川、いや、日本人の原風景なのであろう。

（型染版画家）